

パーラ朝の弥勒の図像学的特徴

森 雅 秀

1. はじめに

ビハール、ベンガル地方に栄えたパーラ朝の領域から出土した単独の弥勒の作例は、これまで30例程度に限られる。この地域の南に位置し、独自の密教美術を伝えるオリッサからも弥勒の出土はあるが、その作例もわずかに17例を確認できたにすぎない。これは、当時人気のあった観音や文殊の作例に比べるとそれほど大きいものではない。⁽¹⁾しかし、菩薩の中では、弥勒の作例数はこれら二菩薩について多い。パーラ朝では弥勒は単独像としての他に、如来像の脇侍としても現れる。弥勒と対をなす脇侍はほとんどの場合、観音である。このような二菩薩を脇侍に従える三尊形式の如来像の作例は40例近くにおよび、この地域の弥勒の作例は単独像よりも脇侍の方が多くなる。しかも、後で見ると、単独像の弥勒よりも脇侍としての弥勒の方に地域的な差異が、より明確に認められる。

ガンダーラからインド、中央アジアの弥勒については、すでに宮治昭氏が大著『涅槃と弥勒の図像学』(1992)の中で網羅的かつ体系的に論じておられる。パーラ朝期の弥勒に関しては、インドの弥勒の最後の部分(第Ⅱ部第5章)で詳しく述べられている。ここでもこの成果を参照しつつ、可能な限り現存する作例を検討して、とくにパーラ朝の支配下にあったベンガルとビハール地方の作例を中心に、その全体像を概観しよう。

2. 単独の弥勒像

パーラ朝の版図からの単独の弥勒像は、断片を含め31例を確認した。出土地は、不明のものが3点あるが、ビハール地方からが25点で、圧倒的多数を占める。明らかにベンガル地方から出土したものは、わずかに2点[4, 13]にすぎない。ビハール地方の中でも、とくにガヤ Gaya 地区のファテープール Fatehpur から8例のブロンズ像が出土している。⁽²⁾そのほとんどは10cm足らずの小像で、同じ鋳型から作られたものもあるようだ。⁽³⁾大僧院があったことで知られるナーランダー Nālandā からは5例で、他にクルキハール Kurkihār やボードガヤー Bodh Gayā からの出土品もみられる。全体数がそれほど多くはない弥勒の作例の中で、ファテープールからの出土数は注目に値する。ベンガル地

方からの2例のうちの1点 [13] は頭頂に仏塔をいただくことから弥勒としたが、マカラを載せた植物を持物とし、頭頂の仏塔も半球型の特異な形態を持つため、弥勒以外の菩薩像である可能性もある。いずれにしてもベンガル地方で単独の弥勒像がこれまでほとんど発見されていないのは確かである。しかし、これは、この地方で弥勒の図像が知られていなかったということではない。如来像の脇侍としてかなりの数の弥勒の作例がこの地に伝えられ、しかも独特の形式で表現されることについては後述する。

坐法と印相について見てみよう。わが国では弥勒は半跏思惟像の作例が多数を占めるが、弥勒が半跏思惟のポーズと結びつくのは中国で、インドにおける制作例は知られていない。⁽⁴⁾ 断片を除く28例のうち、坐像が22例、立像が6例で、坐像の人气が高かったことがうかがえる。坐法はインドで菩薩が一般的にとる遊戯坐が12例、これによく似ているが、片足を垂下させず、座と同じ高さに置く輪王坐が9例ある。倚坐の例も1例 [22] のみある。持物を持たない方の右手の印相は与願印が17例、施無畏印が9例である。転法輪印の作例が2例あるが、これは倚坐像 [22] と遊戯坐像 [21] に1例ずつである。輪王坐の作例の9例のうち8例までが与願印を示す以外は、坐法と印相との間の明確な結びつきは認められない。

この時代の弥勒の典型的な形態をナーランダー出土のブロンズ像 [1] を例にとって概観してみよう。像高約20cmのこの弥勒坐像は、小品の多いパーラ期のブロンズ像の中では、やや規模の大きい部類に属する。遊戯坐で坐り、右手は与願印を示す。髪はいわゆる髪髻冠 (jaṭāmukuta) を結び、豊かな垂髪が肩にかかる。髪のはえぎわには連珠文様の冠飾を付ける。髪の中央には小さな仏塔が表現されるが、これが、左手の持物の龍華樹とともに、弥勒固有の特徴として、尊名比定の根拠となる。首には一重の瓔珞を飾り、左肩には条帛と聖紐をかける。条帛には花の文様がていねいに刻まれている。装身具はこのほかに臂釧と腕釧も付ける。上半身には衣装をまとわず、腰から下には花模様ドーティを巻く。左手は大腿の後方の台座に置くが、ここから植物の茎が伸び、肩のあたりでいくつも花を付ける。釈迦が菩提樹のもとで悟りを開いたように、弥勒が成道するとき坐す龍華樹である。像の後ろには周囲が火炎と連珠で囲まれた円形の光背があるが、これはベンガル・ビハールからオリッサにかけて、パーラ朝期のブロンズ像にしばしば見られるものである。

ハスラコール Hasra Kol 出土でパトナ博物館所蔵の弥勒坐像 [14] (図1) は、この時代の仏教彫刻の優品として何度も紹介されたものである。⁽⁵⁾ 灰色がかった黒玄武岩に高浮雕で表現され、輪王坐のような姿で優雅に坐る。右手は胸の前で施無畏印の印相を示し、左手にはやはり龍華の茎を執る。龍華は小さな円形の5つの花と、柳状の細長い葉で表現される。龍華の表現としてはもっとも一般的なものである。⁽⁶⁾ 高らかに結び上げた髪髻冠の中央に仏塔の姿がはっきり認められる。装身具や衣装の種類は前の例とほとんど

ど同じであるが、表現方法は若干異なり、より洗練された印象を与える。この作品の興味深い点は、触地印仏坐像と観音菩薩坐像とともに一具となり、一種の三尊形式をとることである。この二菩薩を脇侍とする如来像は、パーラ朝の三尊形式の組み合わせとしてもっとも一般的なものであるが、通常は一枚のパネルの左右に菩薩を小さく表現し、このようにそれぞれ単独像として表現された例は、現在のところ他に知られていない。

ファテール出土の一連のブロンズの作品は、これらとはいささか異なる特徴を持つ。髪型はやはり髪髻冠であるが、いずれも円錐形の独特の形態をとる。身につける装身具は比較的少なく、転法輪印を示す作例 [21] を例にとると、聖紐とわずかに条帛の浮彫が認められる程度で、冠飾、瓔珞、臂釧、腕釧などはいずれも身に付けない。龍華樹の表現も独特で、太めの茎から葉が何枚か左右に垂れ、先端に向かうほど全体は細くなる。しかも同じ形状の植物が尊像の右側にも対称的に上に伸びている。このような特徴はファテール出土のブロンズ像に共通してみられるばかりではなく、同じビハール州のアンティチャク Antichak [17] やパタルガタ Patharghata [16]、さらにオリッサのアチュトラジュプール Achutraipur [84] からも発見されていることから、ブロンズによる弥勒の表現方法として広く知られていたものと考えられる。

3. 水瓶を執る弥勒

これらのブロンズ像のうち、上で述べた転法輪印を示す弥勒坐像のみには、左手に執る龍華の上に小さく水瓶が表現されている。弥勒と水瓶（軍持、kuṇḍikā）との結びつきは古く、すでにガンダーラ出土の弥勒と比定される菩薩像にも認められる⁽⁷⁾。しかも龍華や頭前の仏塔よりも弥勒のアトリビュートとしては長い伝統を持つ。そして、水瓶を持つこのような姿は、ブラフマー（梵天、Brahmā）やアグニ（火天、Agni）とも共通する苦行者や聖職者のイメージとして、インド世界の図像史の中の大きな流れに属することは、すでに宮治氏が明らかにしている⁽⁸⁾。その一方で、水瓶を弥勒の持物やシンボルと規定する密教文献も多い。マンダラ観想法の解説書『ニシュパナ・ヨーガーヴァリー』*Niṣpannayogāvali* には、龍華とならんで水瓶が弥勒の持物としてあげられる⁽⁹⁾。さらに、日本に伝わる金剛界、胎蔵の両マンダラでも、弥勒は蓮華の上に水瓶を掲げ、これらの三昧耶マンダラでは蓮華に載った水瓶として表現される。種々の図像集に見られる弥勒も蓮華の上に水瓶を載せる⁽¹⁰⁾。しかし、パーラ朝期の弥勒の単独の作例で、水瓶が表現された例は限られ、しかも、いずれも典型的な弥勒像とはみなし得ない作品である。

何らかの形で水瓶が表現されているのは、上記の転法輪印坐像を含め、6例である。このうち、ウッタル・プラデーシュ Uttar Pradesh あるいはビハール州出土と考えられるブロンズの立像 [23] は、龍華を持たず、左手に水瓶を持つ。この作例はパーラ朝以前のポスト・グプタ期の制作の可能性が高い⁽¹¹⁾。

反対に制作年代のきわめて新しい坐像 [11] と立像 [28] のふたつのブロンズ像にも水瓶が表現されている。華奢なからだつき、優美な姿勢、手の込んだ装飾など、いずれもパーラ朝末期の作風を示している。Huntington (1990: 177) はこのうち坐像の作例の制作年代を、銘文の書体から12世紀と推定し、Schroeder (1981: 287) も立像の方の作品を同じ12世紀に置いている。ナーランダーから出土した、この時代の唯一の多臂の弥勒像 [5] も六臂のうちの一臂で水瓶を持つ。水瓶の首の部分をつかむしぐさは、ガンダーラ出土の水瓶を持つ菩薩像を想起させる。この作品では持物は他に数珠が確定できるが、数珠も弥勒の持物としてパーラ朝以前にはよく知られていた (宮治1992: 365)。パーラ朝でも、比較的初期の弥勒立像 [27] は、施無畏印を示す右手に数珠をかけている。六臂像の作品では龍華は確認できないが、左の第一手の一部に植物の茎のようなものがわずかに残ることから、ここに表現されていたのかもしれない。

水瓶が表現されるもうひとつの例は、ボードガヤー出土でインド博物館所蔵の、与願印を示す弥勒立像 [25] (図2) である。ブロンズ像の多い弥勒の作例としては珍しい黒玄武岩の高浮彫の作品で、石像彫刻としては規模は比較的小さいが、入念に制作された優品である。この作品では水瓶は龍華の花房の上ではなく、茎の途中で分かれた小枝 (あるいは葉) の上に置かれている。この作品でもう一つ注目されるのは、弥勒の両側に四臂の女尊の脇侍が表現されていることである。いずれも中央の弥勒と同じように髪の中央に小さな仏塔をいただく。ただし髪型は髪髻冠ではなく、炎髪のような形態である。右脇侍は右手に矢、左手に弓と木の枝を持ち、残りの二臂は腰に当てながら、腰紐 (右) と「やじり」のようなもの (左) を持つ。丸い大きな耳飾りも付ける。左脇侍は花の付いた木の枝と鉤を右手に、左の一臂には羅索をそれぞれ持ち、残りの手は斧の柄の上に肘を置いて、胸の上で期剋印 (tarjani) を示す。装身具は右脇侍にほとんど同じであるが、腰飾りとして木の葉を腰から何枚も垂らす。これらの女尊は植物の葉や枝を持ったり、腰に巻いたりすることから葉衣 Parnaśabari の可能性も考えられるが、弥勒と葉衣とを結びつける文献的な根拠を筆者は見いだし得ない。

この作品の他に脇侍をとまなう弥勒の作例が2点あるので、最後にこれらについてふれておこう。同じボードガヤー出土で、現地の博物館に置かれている弥勒立像 [26] (図3, 4) も二脇侍をとまなう。ただし、この作品は右脇侍が男尊で、左脇侍が女尊である。このうち、右脇侍の男尊 (図4) は炎髪で冠飾、円形の耳飾り、ドーティなどを身に付ける。両手を胸の前で重ね、杖の上に置く。左脇侍は髪をたばね、胸の前で合掌する。この二脇侍についても文献上の根拠は見いだし得ないが、興味深いことに、同じボードガヤー出土の文殊菩薩立像にほとんど同じ特徴の脇侍が現れる¹³。しかもこの両作品は、菩薩の体つき、姿勢、衣装をはじめ、光背の表現方法から作品全体の大きさに至るまで、驚くほどよく似ている。両者の間で異なるのは髪型、瓔珞、持物の植物といった各尊に

固有の特徴となるものに限られる。おそらく同じ工房で同時代に制作されたものであろうが、ことなる菩薩と同じ脇侍が登場するのは、脇侍と主尊の菩薩との間には関係がなく、この地域特有の菩薩の様式に由来すると考えた方が自然であろう⁶⁴。ただし、作風はかなり異なるが、先ほどふれた施無畏印の弥勒立像 [27] にもこれらの作例によく似た男尊が現れる。観音の脇侍のハヤグリーヴァや文殊の脇侍のヤマーンタカと同じように、短軀で鼓腹の体つきをし、左手の下には杖を置く⁶⁵。男尊に関しては弥勒と何らかのつながりが存在していたのかもしれない。

宮治昭氏の研究 (1992) によれば、グプタ朝からポスト・グプタ期の弥勒には、冠飾や装身具を身につけた「飾られた弥勒」と、髪は髪髻冠を結び、装身具を一切付けない「飾られない弥勒」のふたつの系統がある。前者は多くの場合、持物を持たないが、龍華を持つ例がわずかに存在し、これに対して後者は水瓶を持つことがある。大局的に見ればパーラ朝の弥勒が前者の「飾られた弥勒」の系統に属し、観音と髪型や服飾の同一化が図られたことは、宮治氏の指摘するとおりであるが、水瓶を持つ弥勒の作例も散発的に現れ、装身具を排した「飾られない弥勒」に近い作例もわずかにある。ただし、これが前の時代の様式を直接継承したものであるかは検討を要する。

4. 脇侍としての弥勒

はじめに述べたように、如来像の脇侍として弥勒が表現された作品が50点近く存在する。パーラ朝の如来像についてもすでに宮治氏がまとめておられるが (1993a)、そこでは如来像が八相図、単独の仏伝図、両脇侍菩薩をとる仏三尊像、宝冠仏に大きく分けられている⁶⁶。最後にあげる宝冠仏は、豪華な宝冠や瓔珞を付けた、この時代に特有な如来像であるが、これにも脇侍をとまなう作例が多数存在し、その場合、脇侍には菩薩が置かれる場合と仏が置かれる場合とがある。脇侍の菩薩の組み合わせは、観音と弥勒がほとんどで、それ以外には観音と金剛手の組み合わせが4例、観音とターラー(?)、弥勒と文殊(?) [56] (図15) が各1例ずつ確認されるにすぎない⁶⁷。これらの例外はいずれも通常の僧形の如来像である。宝冠仏の場合、脇侍が菩薩であれば、かならず観音と弥勒の組み合わせをとり、それ以外の組み合わせはこれまで知られていない。

宮治氏の示す主尊の尊容の分類にしたがって、弥勒を脇侍とする如来像の作例数を見てもみると、主尊が触地印の坐像の例がもっとも多く16例、転法輪印の坐像が3例、与願印の立像が7例ある。宝冠仏の場合、坐像は転法輪印の1例を除き、いずれも触地印で、7例を数える。また、宝冠仏の立像を主尊とする例も4例ある。

もう一方の脇侍である観音との位置関係は必ずしも決まっていないが、観音が右脇侍、弥勒が左脇侍になる傾向が強い。また、両脇侍はほとんどが立像で、坐像の例は5例に限られる [45~47, 61, 62]。各菩薩が右手で示す印相は、施無畏印か与願印のいずれ

かをとる例が圧倒的である。この組み合わせにも法則は見いだしがたく、両者とも与願印、あるいは施無畏印、どちらか一方が与願印で、他方が施無畏印というすべての組み合わせが、主尊の尊容、両脇侍の位置関係にかかわらず現れる。工匠の裁量にまかされたのであろう。

代表的な作品を例にとって細部について見てみよう。パトナ博物館所蔵のボードガヤー出土の仏坐像 [32] は、中央の触地印仏の頭上に菩提樹が広がり、台座には金剛杵の浮彫が表現される。金剛宝座に坐る成道の釈迦である。この右脇侍に弥勒、左脇侍に観音が置かれている。いずれも与願印を示し、個々の特徴はきわめてよく似ている。すなわち、髪髻冠を高く結い上げ、三山形式の冠飾をいただき、瓔珞、連珠の聖紐、臂釧、腕釧を飾り、腰にはドーティをまとふ。両者の違いは、頭髮に置かれる標識が、弥勒は仏塔、観音が定印坐像の化仏であることと、左手に持つ植物が龍華と蓮華であるという二点に限られる。龍華は三つの円形の花と柳状の葉で表され、蓮華は正面を向けて大きく開いた一輪の花で表現される。すでに述べた「飾られた菩薩」としての弥勒と観音の同一化がさらに徹底され、両者の違いは各尊固有のシンボルにのみ現れているとみてよいであろう。

しかし、観音と同一化されたこのような弥勒とは異なる姿の一連の作品がある¹⁸⁾。ここでは弥勒は装身具をほとんど付けず、頭前の標識である仏塔も付けない¹⁹⁾。そして左手に持った龍華の上に小さな水瓶を置く。通常の龍華とは異なり、おそらく蓮華と思われる一輪のみの花の上に水瓶を置く作品もある。これらの作品では、もう一方の観音は弥勒とは対照的に、豪華な装身具を身を付けた「飾られた菩薩」の姿を保つが、頭前の標識である化仏は、弥勒に呼応するかのよう、姿を消す。注目すべきは、このような脇侍をとまなう作品がいずれもベンガル地方から出土していることである。主尊の如来像は触地印の坐像が5例ともっとも多く、転法輪印の坐像 [50] (図14) と施無畏印の立像 [57] (図16) が各1例ずつある。もともとベンガル地方からの出土数の少ない宝冠仏の例はない。

これらの作品は台座や光背も独特の形態を持つ。主尊が転法輪印を示す、おそらく釈迦の初転法輪を表す1例 [50] (図14) は、通常通り台座に法輪と二鹿が表現されるが、それ以外の6例では、正面を向いた象を中央に置き、その左右に獅子、さらにその外側に合掌する供養者を置く。象が中央に表現されることから、中尊を阿閼と比定すべきかもしれないが、与願印の立像でも同じ台座が現れることを考慮すれば、本尊の種類に左右されない独特の様式と見ることも可能であろう²⁰⁾。一方、光背については上部に五仏を表現したものが3例 [45, 46, 57] (図13, 16)、また、八相図と組み合わせたものが1例 [47] ある。なお、同じベンガル地方から出土した三尊形式の作品でも、このような台座と光背を持たないものでは、ビハール州の出土品と同様、弥勒は観音と同じ「飾ら

れた菩薩」の姿をとる。²⁰⁾

パーラ朝の単独の弥勒像ではほとんど見られなかった「飾られない弥勒」がこの地方の脇侍菩薩としてのみ表されるのは興味深い。パーラ朝以前に造像活動の栄えたサールナートなどに見られた、より古い時代のいわばオーソドックスな姿の弥勒と、この脇侍の弥勒とが直接つながりを持っているかは、さらに検討が必要であるが、もう一方の脇侍菩薩である観音と対称的な姿を意識しているのは確かであろう。持物の水瓶も、当時の密教文献やわが国に遺された弥勒の図像が蓮華の上に水瓶を持つこととも一致し、龍華と仏塔をシンボルとして持つ、比較的新しい弥勒像が優勢な中で、従来の「飾られない弥勒」の伝統が、この地に限って受け継がれていたのかもしれない。

独特の構成をとる三尊形式の作品について最後に簡単にふれておこう。

インド博物館が所蔵するクルキハール出土の作品 [35] (図 8 ~ 10) は、脇侍の上部に仏坐像を一体ずつ置く。印相は弥勒の上 (向かって左) が転法輪印、観音の上が施無畏印である。この作品は台座部分の中央に獅子、その左右にアパラジター Aparājita とヴァスダーラー Vasudhārā の二人の地天、さらにその外側に象の浮彫を置く。²¹⁾ 類似の仏坐像を脇侍の上方に描く作品はさらに 2 点存在する [36, 37]。ただし、台座の表現は異なり、1 点 [36] は特定の尊像や動物はなく、もう 1 点 [37] (図 9 ~ 11) は蔓草状の植物が表現される。仏坐像のかわりに輪王坐をとる菩薩像を同じ場所に置く作品もある。1 点 [38] はビハール州のサイラギリ Sailagiri (ラージギル Rajgir 近郊) 出土の作品で、Bautze-Picron の紹介する図版 (1991/1992 : Fig. 26) からは細部は明らかではないが、二脇侍と同じ尊格かもしれない。なお、この作品の台座は、すでにふれたベンガル出土の一連の作品と同様に、中央に象、その左右に獅子と供養者が表されている。もう一点 [60] は宝冠仏坐像が主尊で、出土地は前例に近いラッキサライ Laksi Sarai である。現在、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館が所蔵する。

パーラ朝の如来像の形式のひとつとして流行した八相図に二脇侍を組み合わせた作品も 3 例ある [47, 62, 63]。このうち、パトナ博物館が所蔵する宝冠仏の作品 [63] (図 20) は、通常、脇侍が置かれる位置に仏立像 (酔象調伏と三道宝階降下の二場面) をあらかわすため、弥勒と観音は台座部分に置かれている。オリッサ州立博物館の宝冠仏坐像 [64] は頭部および両腕が欠損しているが、残りの手の位置と台座の法輪と二鹿から、転法輪印をとっていたと考えられる。転法輪印をとる宝冠仏の作例は比較的少なく、しかも、これ以外の作品で三尊形式をとるものはいずれも脇侍は仏で、弥勒と観音の二菩薩を脇侍とする例は他に知られていない。

5. おわりに

釈迦に続いて仏となることが約束されている弥勒は、代表的な未来仏として古くから多くの信仰を集めてきた。密教の時代になって数多くの密教の菩薩たちがあらたに生み出されても、実際に作例として残されているのは、観音や文殊などの伝統的な菩薩たちであった。弥勒もその中の一尊であるが、観音や文殊に比べ、その尊容は比較的安定している。また、観音や文殊の場合、獅子吼観音や六字観音のように特定の名称を冠した変化観音が現れたり、マンジュヴァラやアラパチャナといった密教系の文殊が登場したが、弥勒にはこのような多様化は見られない。パーラ朝期の弥勒はグプタ期の伝統を受け継ぎ、頭前に仏塔を飾り、左手に龍華をもった姿で表されることが最も多い。髪型、装身具、衣装などの特徴は観音のそれと大差無く、持物と頭前のシンボルのみが比定の根拠となる。しかしその一方で、より古い時代の弥勒固有の持物である水瓶をもった作例が見られる。さらにベンガル地方から出土した独特の構成の仏三尊像では、装身具をほとんど身につけず、水瓶のみをもった弥勒が登場する。対となる観音は、逆に豪華な装身具を身につけるが、持物は蓮華のみで、やはり頭前の化仏をいただかない。観音と弥勒を脇侍とする仏三尊形式はガンダーラ以来の伝統であるが、密教の時代には脇侍の菩薩にこのような地域的な差異が認められるようになる。一方、ベンガル、ビハール地方とならんで密教美術が栄えたオリッサ地方では、仏の両脇侍には観音と弥勒ではなく、蓮華手と金剛手が置かれる。パーラ朝では単独像よりも作例の多い脇侍としての弥勒が、ここではほとんど現れないのである。このように密教のパンテオンを構成する各尊の図像上の特徴を整理することで、インドの密教美術の地域性が少しずつ明らかになるであろう。

付記

本稿は名古屋大学教授宮治昭氏を中心としたパーラ朝の仏教美術に関する研究会の研究成果の一部である。本稿執筆にあたり、宮治先生からは貴重な図版資料を多数、貸与いただいた。記して謝意を表します。掲載した図版の中の図12~14、16~18の6点は、高野山大学密教文化研究所所蔵の写真資料を利用させていただいた。これ以外の14点は筆者自身の撮影によるものであるが、写真撮影にあたり、Indian Museum (Calcutta), Nālandā Museum, Patna Museum, Bodh Gayā Museum および Archaeological Survey of India の各機関のご協力を賜った。さらに、オリッサ州における現地調査ではウトカル大学教授 S.Sarangi 博士、プーナ大学助手 Y. Kar 博士、ビハール州ではパトナ博物館学芸員 O. P. Panday 博士のご助力を得た。ご協力いただいた皆様に対し感謝申し上げます。なお、本稿は平成9年度文部省科学研究費補助金による基盤研究(C)2「オリッサ州カタック地区の密教図像の研究」(課題番号08610026)による研究成果の一部でもある。

注

- (1) パーラ朝の観音像の作例は、これまで確認されたもので約200例、文殊は約90例である。オリッサからはそれぞれ約100例と約50例出土している。文殊の作例数は拙稿(1996)に、また観音は佐久間・宮治(1993)の示すリストに新たに筆者が加えた資料による。このほかに、過去七仏とともに表される弥勒の作例が何点かあるが、詳細な図版が得られなかったため、この数には含まれない。パーラ朝の時代の過去七仏と弥勒の作品については宮治(1992: 278)参照。また Schroeder は2体の弥勒如来像を紹介するが(1981: Pls. 51A, 49F)、いずれも弥勒と同定する決定的な根拠を見だし得ないため、取り上げなかった。
- (2) 作例リスト Nos. 3, 6~10, 18, 21。
- (3) ファテープールからのブロンズ像については Sharma (1979), Huntington (1979) による報告がある。
- (4) 半跏思惟像については田村・黄編による論文集がある(1985)。同書所収の宮治論文はパーラ朝の弥勒を直接あつかうものではないが、ガンダーラからインドにかけての菩薩像の系統を知る上で重要な研究である。この論文は後に宮治(1992)の第Ⅱ部第4章に再録された。
- (5) 従来、ヴィシュヌブル出土と伝えられてきた作品であるが、Huntington (1984: 106) の記述に基づいて、肥塚氏がハスラコール出土であることを明らかにしている。岩宮(1989: 307)参照。
- (6) この時代の弥勒の龍華の形態については宮治(1992: 379-380)にまとめられている。
- (7) 宮治(1985: 16-17)
- (8) 宮治(1992)第Ⅱ部参照。
- (9) 同書では弥勒は4種のマンダラに含まれる(第2, 19, 20, 22)。このうち、はじめのマンダラでは八大菩薩の中の一尊として、残りのマンダラでは賢劫十六尊の筆頭として登場する。持物については第2、第20のマンダラでは龍華を持ち、第19のマンダラでは部族の上首である阿閼にならって、金剛杵を持つ。最後の第22番「悪趣清浄マンダラ」では龍華とともに水瓶を持つよう規定される(Bhattacharyya 1972: 66)。弥勒を含む賢劫十六尊については森(1993)参照。八大菩薩は頼富(1990)が詳しい。
- (10) 日本に伝わる主要な文献や図像集に見られる弥勒の図像学的特徴は上野(1961: 110-112)にまとめられている。佐和編(1962: 77-79)も参照。頼富・下泉(1994: 95)にも『図像抄』所収の、水瓶を上に乗せた蓮華を持つ弥勒の図版が掲載されている。
- (11) 宮治(1992: 377)にもこの作品への言及がある。
- (12) 森喜子(1990: 126-129)によればパーラ朝期の葉衣の作例は6点を数える。これらの二脇侍に正確に一致する作例はないが、弓矢、期剋印、植物の枝はいずれも頻繁に見られる持物である。腰に植物の葉を付けた作例もダッカ博物館に展示されている。
- (13) 森(1996: No. 114, 図13)
- (14) さらに右脇侍の男尊に類似した男尊のみをとまなう文殊立像(森 1996: No. 111, 図12)が、カルカッタのインド博物館に所蔵されているが、これも作風から、同じ時代、同じ地域の作品と見てよいであろう。
- (15) 観音の脇侍としてのハヤグリーヴァは拙稿(1990: 76)、文殊の脇侍のヤマータカは拙

稿 (1996 : 57-58) 参照。

- (16) このほかに複数の如来像の集合的な作品として五仏のセットがあるが、大半は光背の上部に表現されているもので、それ自体が独立した作例は限られる。
- (17) 金剛手が登場する作例は Huntington (1984 : Pls. 118, 132)、Alam (1985 : Fig. 77)、そしてパトナ博物館所蔵の触地印仏坐像 (森 1997b : No. 11, 図 3) である。脇侍としての金剛手については拙稿 (1997b) 参照。観音とターラーの組み合わせは Ghosh (1980 : Ill. 7)。宮治 (1993a) に含まれる作例一覧ではⅢ-1-9、Ⅲ-2-3、Ⅲ-2-4 がこれらの 5 例のうち 3 例に相当する。残りの 2 例は含まれない。
- (18) 作例リスト Nos. 42, 44~46, 50, 57。
- (19) ただし 1 例 [42] のみは仏塔は付けないが、装身具は身に付ける。
- (20) 後述するように、象、獅子、供養者の台座はビハール州でも見られることから、かなり広い範囲で流行した台座形式ではないだろうか。一方、オリッサ州では象と獅子を台座の両脇に上下に重ねて表現する形式がしばしば見られる (たとえば拙稿 1997a : 図 9 参照)。
- (21) このような作品は 3 点ある。ひとつ [50] (図 14) は中尊が転法輪印を示し、台座には二鹿と法輪、光背上部には飛天のみが表現される (ただし向かって右の飛天の部分は欠損)。また、この作品では龍華の上に水瓶が現れる。残りの 2 点 [42, 43] はいずれも台座の表現はこれらの作品と共通であるが、光背の上部に五仏は置かれず、かわりに菩提樹の枝が表現される。このうち 1 点では水瓶が表されるが、もう 1 点では確認できない。
- (22) 仏陀像に現れる地天については宮治 (1993b) が詳しい。
- (23) 八大菩薩の中の一尊として、仏の脇侍となる例はいくつか知られている。

パーラ朝期の弥勒の作例リスト

凡例

- 番号 (1) 尊名
 (2) 出土地；所在あるいは所蔵者
 (3) データ 材質、年代、法量等。
 (4) 出典 著者名、刊行年、図版番号の順に記載。複数の文献に含まれる場合、刊行年代順とする。76YM, MY83で始まる番号は、名古屋大学古川研究資料館収蔵の図版整理番号で、宮治昭名古屋大学教授・山田耕二名古屋芸術大学教授の撮影による。
 (5) 図像学上の特徴等 印、持物、装身具、坐法、光背、台座、保存状況等について記載。

ビハール・ベンガル

単独像

- | | |
|-------|---------|
| 1～5 | 遊戯坐・与願印 |
| 6～13 | 輪王坐・与願印 |
| 14～20 | 坐像・施無畏印 |
| 21、22 | 坐像・転法輪印 |
| 23～26 | 立像・与願印 |
| 27、28 | 立像・施無畏印 |
| 29～31 | 断片 |

脇侍としての弥勒

- | | |
|-------|------------|
| 32～47 | 触地印仏坐像脇侍 |
| 48～50 | 転法輪印仏坐像脇侍 |
| 51～57 | 仏立像脇侍 |
| 58～64 | 宝冠仏坐像脇侍 |
| 65～68 | 宝冠仏立像脇侍 |
| 69～72 | 過去七仏とならぶ弥勒 |

オリッサ

- | | |
|-------|---------|
| 73～75 | 立像・与願印 |
| 76～80 | 坐像・与願印 |
| 81～84 | 坐像・施無畏印 |
| 85、86 | 坐像・転法輪印 |

ビハール・ベンガル

単 独 像

遊戯坐・与願印

- 1 (1) Maitreya
(2) Nālandā ; Nālandā Mus. (Saraswati) ; National Mus, New Delhi, Acc. No.47. 39 (Schroeder)
(3) Bronze, 20.5cm ht., ca. 9c (Saraswati, Schroeder)
(4) MY83 小123-24 ; Saraswati 1977 : Pl. 7 ; Schroeder 1981 : Pl.55F
(5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。冠飾、瓔珞、条帛、臂釧、腕釧を飾る。周囲に火炎とビーズ状の文様をあしらった円形の光背。傘蓋。方形の基壇。
- 2 (1) Maitreya
(2) Nālandā ; Nālandā Mus.
(3) Bronze, 11.5cm ht., ca. 9c (Saraswati), ca. 9c初頭 (Ray)
(4) Saraswati 1977 : Pl. 9 ; Ray *et al* 1986 : Pl.122
(5) 仏塔を付けた髪髻冠。冠飾、瓔珞、条帛、臂釧、腕釧を飾る。左腕は肘から先が欠損。Saraswati は龍華、Ray は水瓶を左の持物に予想する。
- 3 (1) Maitreya
(2) Fatehpur, Gaya Dt., Bihar ; Bodh Gaya Mus., No.89
(3) Bronze, 8.9cm ht.
(4) Huntington 1979 : Fig. 9
(5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。

瓔珞、聖紐、臂釧、腕釧を飾る。銘文あり。

- 4 (1) Maitreya
(2) Jhewari, Bangladesh ; Indian Mus., Calcutta, Acc. No.8186/A24319
(3) Bronze, 9.5cm ht.
(4) Mitra 1982 : Pl.51
(5) 仏塔を付けた髪髻冠。装身具を付ける。左手に龍華樹。上部に飾りのついた長楕円形の光背。光背の背面に銘文。
- 5 (1) Maitreya
(2) Nālandā ; Indian Mus., Calcutta, Acc. No.A24289/9447
(3) Bronze, 23cm ht., ca. 9c Devapāla の治世 (Ray)
(4) Ray *et al* 1986 : Pl.85
(5) 仏塔を付けた髪髻冠。六臂。持物、印は右手は数珠、(欠損)、与願印、左手は花の茎?、水瓶、床に置く。冠飾、瓔珞、条帛、臂釧、腕釧を付ける。火炎とビーズ状の文様を周囲にあしらった円形の頭光と、象、馬、宝、花などを両側に飾る四角い光背。方形の基壇の左右には獅子。基壇の下段に銘文。多臂の弥勒は現在のところ、この他に知られていない。

輪王坐・与願印

- 6 (1) Maitreya
(2) Fatehpur ; Bodh Gaya Mus., No.91 (Sharma 1979 は No.90とする)
(3) Bronze, 6.6cm ht., ca. 10c (Sharma) ; ca. 12c (Huntington) ; ca. 11c (Ray)
(4) 76YM 小114-29 ; Huntington 1979 :

- Fig. 7 ; Sharma 1979 : Fig. 5 ; Bandyopadhyay 1981 : Pl.57 ; Huntington 1984 : Pl.189 ; Ray *et al* 1986 : Pl.235
- (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。体の右側にも類似の植物が伸びる。装身具は瓔珞と聖紐を付ける程度。Huntington (1984) は Gopāla 3 世時代の観音像 (Huntington 1984 : Pl.76) との類似性を指摘する。Sharma (1979) はクルキハール出土の文殊像 (Patna Mus., No.9683, 図版は Shere 1961 : Pl.22) との類似性を指摘する。Padmapāni (Sharma).
- 7 (1) Maitreya
(2) Fatehpur ; Bodh Gayā Mus., No.90
(3) Bronze, 7.6cm ht., *ca.* 11-12c (Sharma)
(4) 76YM 小114-26 ; Huntington 1979 : Fig. 8 ; Sharma 1979 : Fig. 6
(5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。装身具は付けない。体の右側にも類似の植物が伸びる。右腕の肘から先が欠損。直前の作例とほとんど同じ特徴を持つが、洗練さに欠ける (Sharma)。
- 8 (1) Maitreya
(2) Fatehpur ; [所在不明]
(3) Bronze
(4) Sinha 1983 : Pl.34
(5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。体の右側にも類似の植物が伸びる。
- 9 (1) Maitreya
(2) Fatehpur ; [所在不明]
(3) Bronze
(4) Sinha 1983 : Pl.35
- (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。体の右側にも類似の植物が伸びる。
- 10 (1) Maitreya
(2) Fatehpur ; [所在不明]
(3) Bronze
(4) Sinha 1983 : Pl.36
(5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。体の右側にも類似の植物が伸びる。
- 11 (1) Maitreya
(2) Bihar? ; Collection of Mr. and Mrs. John Gilmore Ford
(3) Bronze, *ca.* 12c., 71.4" × 55.8" × 31.4"
(4) Huntington 1990 : Pl.49
(5) 仏塔を付けた円錐形の髪髻冠。丸い大きな耳飾り、豪華な瓔珞。円形の花模様をあしらったドーティ。臂釧、腕釧、聖紐、腰飾り、足環などを身に付ける。水瓶を載せた龍華樹を左手に持つ。蓮台の下にさらに蓮華の装飾台座と菱形の基壇がある。菱形の基壇の裏側は閉じられ、中央に銘文がある (Huntington 1990 : Figure 13)。Huntington (1990 : 177) によれば、銘文の書体は proto-Bengali あるいは Gaudī で、'Pamsthasādhu Chamvivrasya' と記される。長文の解説が Huntington (1990 : 176-178) に含まれる。
- 12 (1) Maitreya
(2) [出土地不明] ; Indian Mus., Calcutta
(3) Bronze
(4) 76YM 小123-30 ; MY83 小151-24
(5) 髪髻冠。左に龍華樹。体の右側にも

類似的の植物が伸びる。周囲に火炎をあしらった楕円形の光背。

- 13 (1) Maitreya?
 (2) Jhewari ; Indian Mus., Calcutta, Acc. No. A24313/8183
 (3) Bronze, 10.5cm ht., 10c 後半 (Ray)
 (4) Ray *et al* 1986 : Pl. 225
 (5) 頭頂に半球型の仏塔を載せる。右手は花、左手にはマカラを上に乗せた植物を持つ (Ray)。マカラを載せた植物については Mitra (1978 : 95) に言及があることを Ray (1986 : 115, 151) が指摘。

坐像・施無畏印

- 14 (1) Maitreya
 (2) Visnupur (あるいは Hasra Kol), Gaya ; Patna Mus., No. 1682
 (3) Black stone, 114cm ht., 9 c (Mus), 10c (Huntington), 11c (『東洋の美術』)
 (4) 76YM 大59- 1, 8, 76YM 小101- 6 ; Banerji1933 : Pl. XXXII (b) ; Gupta 1965 : Pl. XI ; 『東洋の美術』 1977 : 挿図 166 ; Bhattacharya 1980 : Pl. VI.10 ; Huntington 1984 : 120 ; 岩宮 1989 : 挿図 4 - 5 ; 頼富・下泉 1994 : 94 [図 1]
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。輪王坐。瓔珞、臂釧、腕釧を付ける。触地印仏と観音とともに三尊によるセットを構成。左脇侍の位置に置かれる。単独像三尊からなるこのような三尊形式は現在のところ本作例以外に知られていない。この時代を代表する優品。

- 15 (1) Maitreya
 (2) Nālandā ; Nālandā Mus.
 (3) Bronze, *ca.* 9 c.
 (4) 76MY 小112-3 ; Saraswati 1977 : Pl. 8
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。右手にも植物を持つ。冠飾、瓔珞、条帛、臂釧、腕釧を付ける。遊戯坐。周囲に火炎とビーズ状の文様をあしらった円形の光背。光背の一部欠損。

- 16 (1) Maitreya
 (2) Patharghata, Bhagalpur Dt., Bihar ; Indian Mus., No. 4555
 (3) Bronze
 (4) Banerji 1933 : Pl. LXXI (i)
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。体の右手にも植物が伸びる。遊戯坐。Fatehpur 出土の一連の作品 (Nos. 6 - 10) に、印相を除いてよく似ている。

- 17 (1) Maitreya
 (2) Antichak, Bhagalpur Dt., Bihar ; Private collection
 (3) Metal, 9.5cm ht., *ca.* 12c (Huntington)
 (4) Huntington 1984 : Pl. 194
 (5) 仏塔を付けた円錐形の髪髻冠。左手に龍華樹。体の右手にも植物が伸びる。遊戯坐。

- 18 (1) Maitreya
 (2) Fatehpur, Gaya Dt., Bihar ; [所在不明]
 (3) Bronze
 (4) Sinha 1983 : Pl. 37
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。

体の右手にも植物が伸びる。遊戯坐。

- 19 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; British Mus.,
 1956.12-10.1
 (3) Bronze. 10cm ht., 12c (Schroeder)
 (4) Schroeder 1981 : Pl. 69D
 (5) 仏塔を付けた円錐形の髪髻冠。左手
 に龍華樹の茎 (上部欠損)。体の右手
 にも植物が伸びる。遊戯坐。
- 20 (1) Maitreya
 (2) Vikramasila
 (3) Bronze
 (4) Srivatsava 1987 : p. 51
 (5) 仏塔を付けた円錐形の髪髻冠。左手
 に龍華樹の茎 (上部欠損)。体の右手
 にも植物が伸びる。遊戯坐。

坐像・転法輪印

- 21 (1) Maitreya
 (2) Fatehpur ; Gaya Dt., Bihar ; Godh
 Gayā Mus., No.92 (現在、所在不明)
 (3) Bronze (一部に銀の装飾)、21.8cm
 ht., ca. 12c (Huntington),
 12c (Schroeder), 11c (Sharma, Ray),
 (4) 76YM 小114-28 ; Huntington 1979 :
 Figs. 4 - 6 ; Sharma 1979 : Figs. 3 ,
 4 ; Bandyopadhyay 1981 : Pl. 59 ;
 Schroeder 1981 : Pl. 71C ; Huntington
 1984 : Pl. 190 ; Huntington 1985 : Pl.
 18.20 ; Ray *et al* 1986 : Pls. 233a,
 233b
 (5) 仏塔を付けた円錐形の髪髻冠。体の
 左右に植物 (龍華) が伸びる。このう
 ち左の龍華の上には小さな水瓶が置か

れ、さらに茎が左腕に絡む。聖紐以外
 の装身具を付けない。遊戯坐。台座部
 分は蓮台、蔓草の文様、二重の矩形の
 基壇から構成され、蔓草の中には七宝
 と蓮華(?)が表現される。

Avalokiteśvara (Sharma, Ray)

- 22 (1) Maitreya
 (2) Nālandā, Gaya Dt., Bihar ; Nālandā
 Mus.
 (3) Bronze
 (4) Saraswati 1977 : Pl. 6
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠(?)。左手に龍
 華樹と思われる植物。倚坐。装身具を
 付ける。矩形の基壇。右手欠損。表面
 はかなり磨滅している。

立像・与願印

- 23 (1) Maitreya
 (2) (出土地不明) ; Collection of Prof.
 Samuel Eilenberg
 (3) Brass, 12.6cm ht., 650-750 AD
 (Schroeder), ca. 600 AD (宮治)
 (4) Schroeder 1981 : Pl. 47C ; 宮治
 1992 : 図219
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に水瓶を
 持つ。龍華樹はない。装身具は璽珞の
 み。宝珠形のシンプルな頭光。
- 24 (1) Maitreya
 (2) Kurkihār, Gaya Dt., Bihar ; Patna
 Mus. No.9771
 (3) Brass, 20.3cm ht., 10c (Schroeder)
 (4) Schroeder 1981 : Pl. 65C
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。
 装身具を付ける。周囲が火炎の文様の

舟形光背。

- 25 (1) Maitreya
 (2) Bodh Gayā ; Indian Museum, Calcutta, Acc. No. 3790/A25136
 (3) Black stone, 70cm ht., ca. 9c (Saraswati)
 (4) 76YM 小118-22 ; MY83 小148-35~37 ; MY83 小149-1 ; Foucher 1900 : Fig. 14 ; Banerji 1933 : Pl. X (a) ; Saraswati 1977 : Pl. 5 ; 宮治1992 : 図223 [図2]
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。龍華の茎から分かれた枝に水瓶を載せる。冠飾、瓔珞、聖紐、条帛、腰飾り、ドーティ、臂釧、腕釧などを身につける。左腕の肘から先が欠損。宝珠形の頭光の浮彫。頭光の内側に銘文。光背の向かって左上に仏塔の浮彫。二女尊の脇侍。いずれも四臂で、髪中央に仏塔を飾る。右脇侍は右手に矢、左手に弓と木の枝を持ち、残りの二臂は腰に当てながら、腰紐(右)と「やじり」のようなもの(左)を持つ。炎髪で丸い大きな耳飾りを付ける。左脇侍は右手に花のついた木の枝と鉤、左手の一臂では羂索を持ち、残りの手は斧の柄の上に肘を置いて、胸の前で期克印(tarjani)を示す。装身具は右脇侍にほとんど同じであるが、腰飾りとして木の葉を腰から何枚も垂らす。左脇侍は葉衣か？ 主尊の腕以外は欠損もなく、保存の良好な優品。
- 26 (1) Maitreya
 (2) Bodh Gayā ; Bodh Gayā Mus.

- (3) Black stone
 (4) 76YM 小115-20~22 ; 76YM 大63-1, 7, 8 [図3, 4]
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。龍華は三つの花房からなる独特の形態。冠飾、瓔珞、臂釧、腕釧、聖紐、ドーティなどを身につける。正面性の強い立像。光背上部と主尊の右目周囲欠損。男尊(右)と女尊(左)の二脇侍。右脇侍は炎髪で頭飾、円形の耳飾り、ドーティなどを身につける。両手を胸の前で重ね、杖の上に置く。左脇侍は髪を束ね、胸の前で合掌する。二脇侍の特徴を含め、ボードガヤー博物館所蔵の文殊立像(森 1996 : 図13)とよく似た様式を持つ。相違点は頭髪、耳飾り、瓔珞、持物など各尊固有の特徴に限られる。インド博物館所蔵の文殊立像(森 1996 : 図14)も左脇侍の女尊が表現されていない点を除けば、よく似ている。

立像・施無畏印

- 27 (1) Maitreya
 (2) Kurkihar?, Gaya Dt., Bihar ; Denver Art Mus.
 (3) Black stone, 32 1/4"×16 13/16"×8". ca. 9c 前半 (Huntington)
 (4) Huntington 1990 : Pl. 5
 (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華樹。冠飾、瓔珞、聖紐、条帛、臂釧を身につける。装身具はいずれもシンプルなもの。ドーティにも文様はない。施無畏印を示す右手に数珠を掛ける。頭の周囲に銘文。向かって左に男尊の脇侍。

長髪を肩まで垂らす。鼓腹で短軀。主尊と同様、右手で施無畏印を示し、左手を大腿に置く。向かって右に跪いて合掌する供養者。

- 28 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Pan-Asian Collection
 (3) Silver, gilt copper, 32.4cm ht., 12c (Schroeder)
 (4) Bhattacharya 1980 : Pl. VI. 11 ; Schroeder 1981 : Pl. 71F
 (5) 髮髻冠。仏塔の有無は不明。左手に龍華樹。龍華の上には水瓶を載せる。冠飾、瓔珞、聖紐、臂釧、腕釧などを身につける。

断片

- 29 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Nālandā Mus.
 (3) Black stone
 (4) 76YM 小109-20
 (5) 仏塔を付けた髮髻冠。左手に龍華樹。冠飾、瓔珞、聖紐、臂釧を付ける。光背の向かって右上に仏塔の浮彫。上半身のみ残存。
- 30 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Bodh Gayā Mus.
 (3) Black stone
 (4) 76YM 小114-36
 (5) 仏塔を付けた髮髻冠。左手に龍華樹。冠飾、瓔珞、聖紐を付ける。上半身のみ残存。おそらく輪王坐で与願印を示す。
- 31 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Bodh Gayā Mus.

- (3) Black stone
 (4) 76YM 小113-31
 (5) 仏塔を付けた髮髻冠。冠飾を付ける。頭部のみ残存。

脇侍としての弥勒

触地印仏坐像脇侍

- 32 (1) Maitreya
 (2) Bodh Gayā, Gaya Dt., Bihar ; Patna Mus.
 (3) Black stone, 9c 後半 (Huntington)
 (4) 76YM 大59-2 ; Huntington 1984 : Pl. 103 ; Leoshko 1988b : Pl. 12 ; 頼富 1991 : 図4 ; 宮治1992 : 図221 ; 宮治 1993 : 図14, リストⅢ-1-1 ; 頼富・下泉1994 : 66
 (5) 触地印仏坐像の右脇侍。左脇侍は観音。立像。光背上部左右に飛天と仏塔の浮彫。仏塔を付けた髮髻冠。右手は与願印。左手に龍華樹。
- 33 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明], Bihar ; Patna Mus.
 (3) Black stone
 (4) 76YM 大61-7 ; 宮治1992 : 図222 ; 宮治1993 : リストⅢ-1-2
 (5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。光背上部左右に飛天。仏塔を付けた髮髻冠。右手は施無畏印。左手に龍華樹。
- 34 (1) Maitreya
 (2) Nālandā ; Nālandā Mus.
 (3) Black stone
 (4) [図5]

- (5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。仏塔を付けた髪髻冠。右手は施無畏印。左手は龍華樹を持つ。光背上部左右に二飛天。
- 35 (1) Maitreya
 (2) Kurkihār, Gaya Dt., Bihar ; Indian Mus., Calcutta, Acc. No. UR53/A24136
 (3) Black stone
 (4) 76YM 小120-6 ; MY83 小152-28~31 ; Leoshko 1988a : Figs 12, 13 ; 宮治1993 : 図15, 16a, 16b, リストⅢ-1-3 [図6~8]
 (5) 触地印仏坐像の右脇侍。左脇侍は観音。立像。仏塔を付けた髪髻冠。右手は施無畏印。左手に龍華樹。光背上部左右に飛天と二仏坐像(向かって左は転法輪印、右は施無畏印)。台座中央に獅子、その左右に二女尊(VasudhārāとAparājitā)と象の浮彫。
- 36 (1) Maitreya
 (2) Bihar ; Indian Mus., Calcutta, Acc. No. UR 48/A24149
 (3) Black stone
 (4) 76YM 小120-25 ; MY83 小153-22~24 ; 宮治1993 : リストⅢ-1-8 [図9~11]
 (5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。三山装飾の髪髻冠。仏塔は表現されていない(?)。右手は施無畏印。左手に龍華樹。光背の上部左右に仏坐像の浮彫。向かって右は定印、左は触地印。台座の左右に獅子の浮彫。
- 37 (1) Maitreya
 (2) Rajaona, Bihar ; [所蔵不明]
- (3) Black stone
 (4) Bautze-Picron 1991/1992 Fig. 1 ; 宮治1993 : リストⅢ-1-14
 (5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。髪髻冠。仏塔は表現されていない(?)。右手は施無畏印。左手に龍華樹を持つ。光背上部欠損。二脇侍の上方に仏坐像。腕の部分欠損のため印相は不明。台座の最下段に銘文。
- 38 (1) Maitreya
 (2) Sailagiri, Rajgir-Giryek, Bihar ; Indian High Commission (London)
 (3) Black stone
 (4) Bautze-Picron 1991/1992 Fig. 26 ; 宮治1993 : リストⅢ-1-7
 (5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。仏塔を付けた髪髻冠(?)。右手は胸に当てる。左手に龍華樹。光背の上部左右にも両脇侍によく似た(?)二菩薩の輪王坐の浮彫がある。脇侍と両菩薩との間には仏塔の浮彫。台座部分に象、獅子、供養者の浮彫。台座最下段に銘文。
- 39 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Indian Mus., Calcutta
 (3)
 (4) 76YM 小120-26 ; MY83 小153-25~27 ; 宮治1993 : リストⅢ-1-4
 (5) 未見
- 40 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Indian Mus., Calcutta
 (3)
 (4) 76YM 大66-4 ; 76YM 小118-10 ; MY83 小148-20~22 ; 宮治1993 : リス

トⅢ-1-5

- (5) 未見。頭前に仏塔を付ける。左手に持つ龍華が花一輪の特異な形態。観音は蓮華の上に梵経を載せる。(以上、宮治(1993:25)による)
- 41 (1) Maitreya
 (2) Bodh Gayā ; 現地
 (3) Grey stone, 67cm, 8c 後半 (Leoshko)
 (4) Leoshko 1988a : Fig. 9 ; 宮治1993 : リストⅢ-1-10
 (5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。右手は扠子、左手に龍華をもつ。三尊はいずれも頭部欠損。台座にアパラジターとヴァスダーラー。
- 42 (1) Maitreya
 (2) Bangladesh, Northern Bengal (?) ; Virginia Mus. of fine Arts
 (3) Black stone, 39 1/2"×19 1/2"×8" ca. 11c (Huntington)
 (4) Huntington 1990 : 表紙, Pl. 29 ; 宮治1993 : リストⅢ-1-11
 (5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。髮髻冠。仏塔は表現されていない。右脇侍の観音も化仏を付けない。右手は施無畏印。水瓶を上に乗せた龍華樹を左手に持つ。装身具を付ける。立像。光背上部左右に仏塔、飛天、キンナラの浮彫。台座には象、獅子、供養者が表現される。
- 43 (1) Maitreya
 (2) Dhaka ; National Mus. of Bangladesh, Acc. No.72. 387
 (3) Black stone, 7" ht.
 (4) A2-001
- (5) 触地印仏坐像の右脇侍。左脇侍は観音。立像。髮髻冠。右手は与願印。左手に龍華を持つ。光背上部左右に仏塔の浮彫。化仏、仏塔は表現されていない。
- 44 (1) Maitreya
 (2) Kirtail, Manda, Naogaon, Rajshaj ; Varendra Mus., Acc. No.250
 (3) Black stone, 12c (Mus)
 (4) [図12]
 (5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。髮髻冠。仏塔は表現されない。右脇侍の観音も化仏を付けない。右手は施無畏印。水瓶を載せた龍華を左手に持つ。光背上部欠損。
- 45 (1) Maitreya
 (2) Bareya, Nadia Dt., Bengal ; State Archaeological Mus. of Bengal, Calcutta
 (3) Black stone, ca. 11c 半ば (Huntington)
 (4) Huntington 1984 : Pl. 223 ; Huntington 1985 Pl. 18. 11 ; 宮治 1993 : 図17, リストⅢ-1-12
 (5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。いずれも遊戯坐(あるいは輪王坐)で坐る。髮髻冠。仏塔は表現されていない。右脇侍の観音も化仏を付けない。右手は上に上げる。水瓶を上に乗せた蓮華(?)を左手に持つ。装身具は付けない。光背上部に五仏の浮彫。印相は向かって左より転法輪印、与願印、触地印、定印、施無畏印。台座に象、獅子、供養者の浮彫。

46 (1) Maitreya

(2) Vikrampur, Bengal ; National Mus. of Bangladesh, Acc. No.1117

(3) Black stone

(4) Saraswati 1975 : Pl. III, Fig. 9 ; Bhattacharya 1985 : Fig. 21 ; 宮治1993 : リストⅢ-1-13 [図13]

(5) 触地印仏坐像の右脇侍。左脇侍は観音。いずれも遊戯坐(あるいは輪王坐)で坐る。髮髻冠。仏塔は表現されていない。左脇侍の観音も化仏を付けない。右手は施無畏印。水瓶を上に乗せた蓮華(?)を左手に持つ。装身具は付けない。光背は寺院を模した浮彫。光背上部に五仏の浮彫。印相は向かって左より与願印、転法輪印、触地印、施無畏印、定印。五仏の周囲には飛天とキンナラの浮彫もある。台座に象、獅子、供養者の浮彫。

47 (1) Maitreya

(2) Betagi, Chittagong ; [所蔵不明]

(3) Black stone, 130×70cm

(4) Alam 1985 : Fig. 76 ; Saraswati 1975 : Pl. IV, Fig. 12

(5) 触地印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。遊戯坐。髮髻冠。右手は与願印。左手に龍華を持つ。装身具は付けない。光背は寺院を模した浮彫で、その周囲には八相図(降魔成道を除く)と仏坐像二体が表現される。さらに光背の余白と台座部分には人物群の浮彫。

転法輪印仏坐像脇侍

48 (1) Maitreya

(2) [出土地不明] ; Nālandā Mus.

(3) Black stone

(4) 76YM小109-106 ; 宮治1993 : 図18, リストⅢ-2-1

(5) 転法輪印仏坐像の右脇侍。左脇侍は観音。立像。頭部欠損。右手は与願印。左手に龍華を持つ。光背上部左右に飛天。台座中央に法輪と二鹿、その左右に獅子の浮彫。光背一部欠損。

49 (1) Maitreya

(2) [出土地不明] ; Indian Mus., Calcutta

(3) Black stone

(4) Banerji 1933 : Pl. XXVII (d) ; 宮治1993 : リストⅢ-2-2

(5) 転法輪印仏坐像の左脇侍(?)。右脇侍は欠損。立像。髮髻冠。仏塔の有無は不明。右手は施無畏印。左手の持物欠損。光背のかかなりの部分が欠損。図版不鮮明のため詳細不明。

50 (1) Maitreya

(2) Kashipur, Patnitala, Naogaon, Rajshahi ; Varendra Mus., Acc. No.267

(3) Black stone, 10-11c (Mus)

(4) [図14]

(5) 転法輪印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。頭髪部欠損。右手は施無畏印。水瓶を上に乗せた龍華を左手に持つ。光背向かって左上に飛天。台座中央に法輪と二鹿の浮彫。光背向かって右上部欠損。

仏立像脇侍

51 (1) Maitreya

(2) Bodh Gayā ; 現地

- (3) Black stone
- (4) 76YM 大63-12 ; 76YM 小117-19 ; 宮治1993 : 図19, リストⅢ-3-1
- (5) 与願印仏立像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。仏塔を付けた髪髻冠。右手は施無畏印。左手に龍華を持つ。光背上部左右に仏塔の浮彫。光背向かって左上部に銘文。
- 52 (1) Maitreya
 (2) Bodh Gayā ; 現地
 (3) Black stone
 (4) 76YM 小117-22 ; 宮治1993 : リストⅢ-3-2
 (5) 未見。
- 53 (1) Maitreya
 (2) Bodh Gayā ; 現地
 (3) Black stone
 (4) 76YM 大63-13 ; 76YM 小117-21 ; 宮治1993 : リストⅢ-3-3
 (5) 未見。脇侍はいずれも頭前の標識を付けない (宮治1993 : 28)。
- 54 (1) Maitreya
 (2) Bodh Gayā ; 現地
 (3) Black stone
 (4) 76YM 小117-23 ; 宮治1993 : リストⅢ-3-4
 (5) 未見。
- 55 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Indian Mus. Calcutta
 (3) Black stone
 (4) Banerji 1933 : Pl. XⅢ (b) ; 宮治1993 : リストⅢ-3-5
 (5) 与願印仏立像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。仏塔を付けた(?)髪髻冠。右手は施無畏印。左手に龍華を持つ。光背上部左右に飛天。光背左右に銘文。図版不鮮明のため詳細不明。
- 56 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Nalanda Mus.
 (3) Black stone
 (4) 76YM 小109-35 ; 宮治1993 : 図20, リストⅢ-3-6 [図15]
 (5) 施無畏印仏立像の右脇侍。左脇侍は文殊(?)。立像。仏塔を付けた髪髻冠。右手は与願印。左手に龍華を持つ。光背上部左右に飛天。光背上部左右に銘文。
- 57 (1) Maitreya
 (2) Dinajpur, Bengal ; Varendra Mus., Acc. No.266
 (3) Black stone
 (4) B 2 -006 ; Huntington ; 1984 : Pl. 238 ; 宮治1993 : リストⅢ-3-7 [図16~18]
 (5) 施無畏印(?)仏立像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。髪髻冠。仏塔は表現されていない。観音も化仏を付けない。右手は施無畏印。水瓶を載せた龍華を左手に持つ。光背上部に五仏と二飛天の浮彫。聖紐以外の装身具を付けない。五仏の印相は向かって左より転法輪印、与願印、触地印、定印、施無畏印。脇侍の足元には弘子を持った女性が一人ずつ表現される。台座の中央に象、その両側に獅子、男尊 (尊名不明)、供養者がそれぞれ二体表現される。

宝冠仏坐像脇侍

58 (1) Maitreya

(2) [出土地不明] ; Indian Mus., Calcutta, Acc. No.372/A25143

(3) Black stone, 10c (Mus)

(4) 宮治1993 : 図24, リストV-1-1

[図19]

(5) 触地印宝冠仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。仏塔を付けた髪髻冠。右手は施無畏印。左手に龍華を持つ。光背上部左右に仏塔の浮彫。蓮台の花弁に銘文。台座中央に女性 (Vasudhārā?)、左右に獅子の浮彫。

59 (1) Maitreya

(2) Kurkihār, Gaya Dt., Bihar

(3) Metal, ca. 10 c 半ば (Huntington)

(4) Huntington 1984 : Pl. 180 ; Huntington 1990 : Fig. 73 ; 宮治1993 : リストV-1-3

(5) 触地印宝冠仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。三角形の独特の髪髻冠。仏塔の有無は不明。右手は施無畏印。左手に龍華を持つ。

60 (1) Maitreya

(2) Lakhi Sarai (?), Bihar ; Victoria & Albert Mus.

(3) Black stone

(4) Skelton 1979 : Pl. 9 ; Bhattacharyya 1980 : Pl. VI. 9 ; Bautze-Picron 1991/1992 : Fig. 36 ; 宮治1993 : リストV-1-5

(5) 触地印宝冠仏坐像の左脇侍。立像。右脇侍は観音。髪髻冠。仏塔の有無は不明。右手は施無畏印。左手に龍華を

持つ。光背上部左右に菩薩坐像と飛天。

61 (1) Maitreya

(2) West Bengal, Malda Mus.

(3) Black stone, ca. 11c 後半 (Huntington)

(4) Bhattacharya 1989 : Fig. 28 ; 宮治1993 : リストV-1-6

(5) 未見。

62 (1) Maitreya

(2) Antichak, Bhagalpur Dt., Bihar ; Patna Univ.

(3) Black stone, ca. 11c (Huntington)

(4) Huntington 1984 : Pl. 153 ; 宮治1993 : リストV-1-7

(5) 触地印宝冠仏坐像の右脇侍。輪王坐。左脇侍は観音。髪髻冠。仏塔の有無は不明。右手は施無畏印。左手に龍華を持つ。主尊の周囲に降魔成道を除く八相図。台座左右に獅子と供養者の浮彫。

63 (1) Maitreya

(2) [出土地不明] ; Patna Mus., Acc. No.11351

(3) Black stone, ca. 11c (Huntington)

(4) [図20]

(5) 触地印宝冠仏坐像の右脇侍。遊戯坐像。左脇侍は観音。いずれも台座左右に表現される。髪髻冠。仏塔の有無は不明。右手は与願印。左手に龍華を持つ。主尊の周囲に降魔成道を除く八相図。台座左右に獅子と供養者の浮彫。

64 (1) Maitreya

(2) Bihar ; Orissa State Mus.

(3) Black stone, 69cm, 9c (Mus)

(4) 森1997a : No. 2, 図6

(5) 転法輪印仏坐像の左脇侍。右脇侍は観音。立像。仏塔を付けた髪髻冠。右手は施無畏印。左手に龍華を持つ。台座中央に法輪と二鹿、その左右に獅子の浮彫。台座に銘文。主尊の首から上部欠損。転法輪印をとる宝冠仏坐像で、脇侍が菩薩である作例は現在のところ他に知られていない。

宝冠仏立像脇侍

- 65 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Patna Mus.
 (3) Black stone
 (4) 76YM 大60- 6 ; 76YM 小102- 5 ; 宮治1993 : リストV - 2 - 1
 (5) 未見。
- 66 (1) Maitreya
 (2) Antichak, Bhagalpur Dt., Bihar ; [所蔵不明]
 (3) Black stone
 (4) Srivatsava 1987 : 47 ; Bautze-Picron 1991/1992 : Fig. 27 ; 宮治1993 : リストV - 2 - 2
 (5) 施無畏印宝冠仏立像の左脇侍。立像。右脇侍は観音。髪髻冠。仏塔の有無は不明。右手は施無畏印。左手に龍華を持つ。光背の上部中央に仏塔、左右に飛天の浮彫。
- 67 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Linden Mus., Stuttgart
 (3) Black stone
 (4) Bautze-Picron 1991/1992 : Fig. 33 ; 宮治1993 : リストV - 2 - 3

(5) 施無畏印宝冠仏立像の左脇侍。立像。右脇侍は観音。髪髻冠。仏塔の有無は不明。右手は施無畏印。左手に龍華を持つ。光背の上部左右に仏坐像の浮彫。印相は向かって左が触地印、右が転法輪印。

- 68 (1) Maitreya? [欠損]
 (2) Rajaona, Bihar ; 現地
 (3) Black stone
 (4) Bautze-Picron 1991/1992 : Fig. 6 ; 宮治1993 : リストV - 1 - 4
 (5) 主尊は触地印宝冠仏。左脇侍、主尊の首より上部欠損。右脇侍は観音か?

過去七仏とならぶ弥勒

- 69 (1) Maitreya
 (2) Bihar ; Indian Mus., Calcutta
 (3) Black stone
 (4) 宮治1992 : 図220
 (5) 結跏趺坐。右手は与願印。左手に龍華。仏塔を頭前に置く。装身具は付けない。
- 70 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Indian Mus., Calcutta
 (3) Black stone
 (4) Banerji 1933 : Pl. XXXIII (c)
 (5) 立像。右手は与願印。左手に龍華。仏塔を頭前に置く。条帛以外の装身具は付けない。
- 71 (1) Maitreya
 (2) [出土地不明] ; Indian Mus., Calcutta
 (3) Black stone

- (4) Banerji 1933 : Pl. XXXI (b)
- (5) 立像。右手は与願印。左手に龍華。仏塔を付けた髪髻冠。装身具を付ける。

- 72 (1) Maitreya
- (2) [出土地不明] ; Indian Mus., Calcutta
 - (3) Black stone
 - (4) Banerji 1933 : Pl. XIV (e)
 - (5) 立像。右手は施無畏印。左手に龍華。図版不鮮明のため詳細不明。

オリッサ

立像・与願印

- 73 (1) Maitreya? (Mañjuśri?)
- (2) Ratnagiri ; 現地僧院跡
 - (3) Stone
 - (4) 佐和1982 : 図37
 - (5) 表面の磨滅が著しい。向かって左下に合掌する女性供養者。
- 74 (1) Maitreya
- (2) Lalitagiri ; 現地収蔵庫
 - (3) Stone
 - (4) 佐和1982 : 図98
 - (5) 髪髻冠。仏塔の有無は不明。左手に龍華 (表面は磨滅)。光背向かって左上に触地印仏坐像。光背向かって右上部欠損。八大菩薩中の一尊。
- 75 (1) Maitreya
- (2) Lalitagiri ; 現地収蔵庫
 - (3) Stone, 7'6"×3'2", 8-9c (Sahu)
 - (4) Sahu 1958 : Fig. 23 ; 佐和1982 : 図104 ; 頼富1990 : 図74
 - (5) 髪髻冠。仏塔は表現されていない。
- 76 (1) Maitreya
- (2) Achutrajpur ; Orissa State Mus., Acc. No.332
 - (3) Bronze, 9.2cm ht., 9c以降 (Mitra), 8c (Ray)
 - (4) Mitra 1978 : Pl. 74 ; Ray *et al* 1986 : Pl. 48
 - (5) 仏塔を付けた髪髻冠。水瓶を載せた龍華を左手に持つ。結跏趺坐。表面は磨滅。
- 77 (1) Maitreya
- (2) Ratnagiri ; 現地
 - (3) Bronze
 - (4) Mitra 1981 : Pl. XXXIII (A)
 - (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手には龍華。結跏趺坐。
- 78 (1) Maitreya?
- (2) Ratnagiri ; 現地
 - (3) Stone, 38.1×23.5cm
 - (4) Mitra 1981 : Pl. CCCXXXIII (A)
 - (5) 頭部、右腕、脚部欠損。おそらく遊戯坐で与願印を示す。龍華の茎のみ残存。
- 79 (1) Maitreya
- (2) Achutrajpur ; Orissa State Mus., Acc. No. 313
 - (3) Bronze, 10.5cm ht., 8c以前 (Mitra)
 - (4) Mitra 1978 : Pl. 73
- 左手に龍華。足元の左右に女性が蓮華の上に輪王坐で坐る。いずれも睡蓮を持つ。光背上部左右に飛天。光背左右に火炎の文様。八大菩薩中の一尊。

坐像・与願印

- (5) 仏塔を付けた髪髻冠。左手に龍華。
遊戯坐。光背の一部欠損。

- 80 (1) Maitreya?
(2) Baud ; [所蔵不明]
(3) Bronze, 9 c (Sahu)
(4) Sahu 1958 : Fig. 52
(5) 髪髻冠。左手に龍華。遊戯坐。傘蓋
のついた円形の光背。図版不鮮明のため
詳細不明。

坐像・施無畏印

- 81 (1) Maitreya
(2) Ratnagiri ; 現地
(3) Stone, 18.5×11.5cm
(4) Mitra 1981 : Pl. CLXXII (D)
(5) 髪髻冠。左手に龍華。遊戯坐。体の
右側にも植物。
- 82 (1) Maitreya
(2) Ratnagiri ; 現地
(3) Stone
(4) Mitra 1981 : Pl. LXXII (B)
(5) 髪髻冠。左手に龍華。遊戯坐。奉献
小塔龕中の浮彫。
- 83 (1) Maitreya
(2) Ratnagiri ; 現地
(3) Stone
(4) Mitra 1981 : Pl. LXXII (C)
(5) 髪髻冠。左手に龍華。遊戯坐。奉献
小塔龕中の浮彫。
- 84 (1) Maitreya
(2) Achutrajpur ; Orissa State Mus.,
Acc. No.322
(3) Bronze, 9.5cm ht., 12c (Mitra)
(4) Mitra 1978 : Pl. 75

- (5) 髪髻冠。左手に龍華。遊戯坐。奉献
小塔龕中の浮彫。体の右側にも植物。
Fatehpur 出土のブロンズの弥勒像 (Nos.
6-10) に酷似。

坐像・転法輪印

- 85 (1) Maitreya
(2) Ratnagiri ; 現地
(3) Stone, 38.1×23.5cm
(4) Mitra 1981 : Pl. CLXXI (B)
(5) 髪髻冠。水瓶を載せた龍華を左手に
持つ。遊戯坐。光背上部左右に蓮華。
台座左右に供養者。
- 86 (1) Maitreya
(2) Balasore ; 現地
(3) Stone
(4) Sahu 1958 : Fig. 78
(5) 髪髻冠。真横から撮影した図版のみ
を Sahu は紹介。詳細は不明。

引用文献

- 岩宮武二 1989 『アジアの仏像(上)』集英社。
- 上野照夫 1961 「弥勒像の図像的考察」『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』塚本博士頌寿記念会、pp.101-112。
- 佐久間留理子・宮治昭 1993 「パーラ朝における観自在菩薩の図像的特徴(3)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』9:107-129。
- 佐和隆研編 1962 『仏像図典』吉川弘文館。
- 佐和隆研編 1982 『密教美術の原像』法蔵館。
- 田村圓澄・黄壽永編 1985 『半跏思惟像の研究』吉川弘文館。
- 町田甲一編 1977 『東洋の美術Ⅱ』旺文社。
- 宮治 昭 1981 『インド美術史』吉川弘文館。
- 宮治 昭(代表) 1985 『インド・パキスタンの仏教図像調査』弘前大学。
- 宮治 昭 1992 『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館。
- 宮治 昭(代表) 1993a 『インドのパーラ朝美術の図像学的研究』(平成3・4年度科学研究費補助金研究成果報告書)。
- 宮治 昭 1993b 「インドの地天の図像とその周辺」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集インド学密教学研究』法蔵館、pp.877-908。
- 森 雅秀 1990 「パーラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』6:69-111。
- 森 雅秀 1993 「賢劫十六尊の構成と表現」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集インド学密教学研究』法蔵館、pp.909-937。
- 森 雅秀 1996 「パーラ朝の文殊の図像学的特徴」『高野山大学論叢』31:55-98(横組)。
- 森 雅秀 1997a 「オリッサ州立博物館の密教美術」『高野山大学密教文化研究所紀要』10:29-70。
- 森 雅秀 1997b 「パーラ朝の金剛手・金剛薩埵の図像学的特徴」『密教図像』16(印刷中)。
- 森 喜子 1990 「パーラ朝の女尊の図像的特徴(1)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』6:113-155。
- 頼富本宏 1990 『密教仏の研究』法蔵館。
- 頼富本宏 1991 「中インド・シンプル遺跡の仏教美術」『仏教芸術』191:40-57。
- 頼富本宏・下泉全暁 1994 『密教仏像図典——インドと日本のほとけたち』人文書院。
- Alam, A. K. M. Shamsul 1985 *Sculptural Art of Bangladesh: Pre-Muslim Period*. Dhaka: Department of Archaeology and Museums.
- Bandyopadhyay, B. 1981 *Metal Sculptures of Eastern India*. Delhi.
- Banerji, Rakhal Das 1933 *Eastern Indian School of Mediaeval Sculpture*. Archaeological Survey of India, New Imperial Series, XLV II. Delhi: Manager of Publications.
- Bautze-Pieron, C. 1991/1992 Lakhi Sarai, An Indian Site of Late Buddhist Iconography, and Its Position within the Asian Buddhist World. *Silk Road Art and Archaeology* 2: 239-273.
- Bhattacharyya, B. 1968 (1958) *The Indian Buddhist Iconography Mainly Based on the*

- Sādhnamālā and Other Cognate Tantric Texts of Rituals*. 2nd ed. Calcutta : K. L. Mukhopadhyay.
- Bhattacharyya, B. 1972 (1949) *Nispannayogāvalī of Mahāpandita Abhayākaragupta*. G. O. S. No. 109. Baroda : Oriental Institute.
- Bhattacharya, G. 1980 Stūpa as Maitreya's Emblem. In A. L. Dallapiccola (ed.), *The Stūpa, Its Religious Historical and Architectural Significance*, Wiesbaden, pp. 100-111.
- Bhattacharya, G. 1985 Buddha Śākyamuni and *Pañca-Tathāgatas* : Dilemma in Bihar-Bengal. In *South Asian Archaeology 1983. Papers from the Seventh International Conference of the Association of South Asian Archaeologists in Western Europe Held in Musées Royaux d'Art et d'Histoire*. Brussels, pp. 350-371.
- Bhattachali, N. K. 1929 *Iconography of Buddhist and Brahmanical Sculpture in the Dacca Museum*. Dacca : Dacca Museum Committee.
- Foucher, A. 1900-5 *Étude sur l'iconographie bouddhique de l'Inde, d'après des documents nouveaux*. 2 vols. Bibliothèque de l'école des hautes études : Sciences religieuses vol. 3, pts. I - II, Paris : Ernest Leroux.
- Gupta, P. I. 1965 *Patna Museum Catalogue of Antiquities*. Patna : Patna Museum.
- Leoshko, J. 1988a The Case of the Two Witnesses to the Buddha's Enlightenment. *Mārg* 39(4) : 39-52.
- Leoshko, J. 1988b The Vajrasana Buddha. *Mārg* 40(1) : 29-44.
- Huntington, S. L. 1979 Some Bronzes from Fatehpur, Gaya. *Oriental Art* 25(2) : 240-247.
- Huntington, S. L. 1984 *The "Pāla-Sena" Schools of Sculpture*. Studies in South Asian Culture Vol. X. Leiden : E. J. Brill.
- Huntington, S. L. 1985 *The Art of Ancient India*. Tokyo : John Weatherhill Inc.
- Huntington, S. L. & J. C. Huntington 1990 *Leaves from the Bodhi Tree : The Art of Pala India (8th-12th centuries) and Its International Legacy*. Seattle : The Dayton Art Institute.
- Mitra, D. 1978 *Bronzes from Achutrajpur, Orissa*. Delhi : Agam Kala Prakashan.
- Mitra, D. 1981 *Ratnagiri(1958-61)*. Vol. I. Memories of the Archaeological Survey of India, No. 80. New Delhi : Archaeological Survey of India.
- Mitra, D. 1982 *Bronzes from Bangladesh*. Delhi : Agam Kala Prakashan.
- Mitra, D. 1983 *Ratnagiri(1958-61)*. Voll. II. Memories of the Archaeological Survey of India, No. 80. New Delhi : Archaeological Survey of India.
- Ray, N. R., K. Khandalavala & S. Gorakshkar 1986 *Eastern Indian Bronzes*. New Delhi : Lalit Kalā Academy.
- Sahu, N. K. 1958 *Buddhism in Orissa*. Cuttak : Utkal University.
- Saraswati, S. K. 1977 *Tantrayāna Art : An Album*. Calcutta : Asiatic Society.
- Saraswati, S. K. 1975 Rare Architectural Types in Manuscript Illustrations. *Bangladesh Lalit Kalā, Journal of the Dacca Museum* 1(2) : 1-18.
- Schroeder, U. v. 1981 *Indo-Tibetan Bronzes*. Hong Kong : Visual Dharma Publications.

233 パーラ朝の弥勒の図像学的特徴 (森)

Sharma, B. N. 1979 Pāla Bronzes from Fatehpur, Gaya. *East and West* 29 (1 - 4) : 127-130.

Shere, S. A. 1961 *Bronze Images in Patna Museum*. Patna.

Sinha, K. 1983 *The Early Bronze of Bihar*. New Delhi : Ramanand Vidya Bhavan.

Skelton, R. & M. Francis 1979 *Art of Bengal : The Heritage of Bangladesh and Eastern India*. London : Whitechapel Art Gallery.

Srivatsava, K M 1987 The Lost University of Vikramasila. *Art of Asia* 17(7) : 44-55.

<キーワード> 弥勒、パーラ朝、三尊形式



図2 両脇侍をとる彌勒立像 (インド博物館)

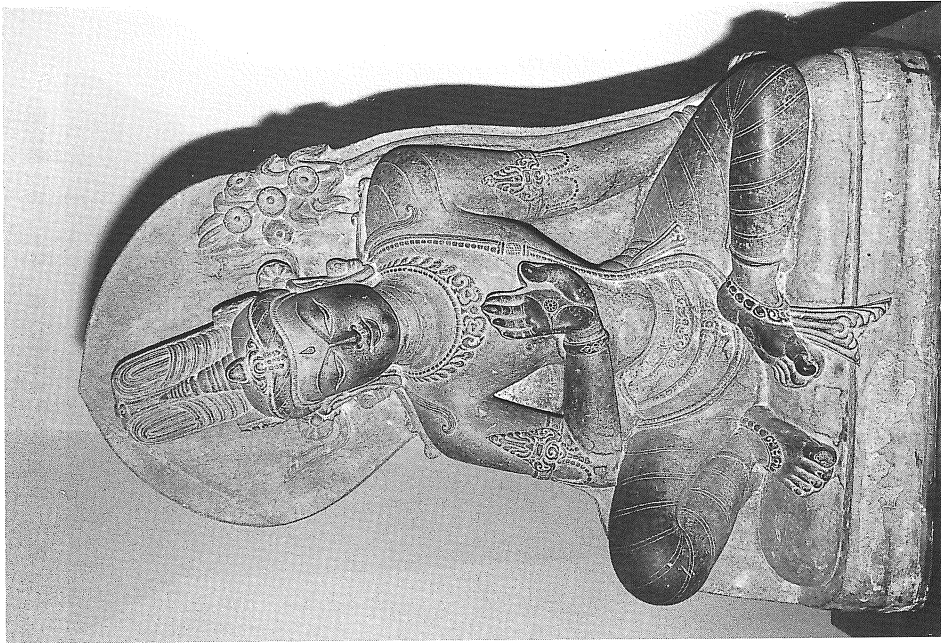


図1 彌勒坐像 (バトナ博物館)

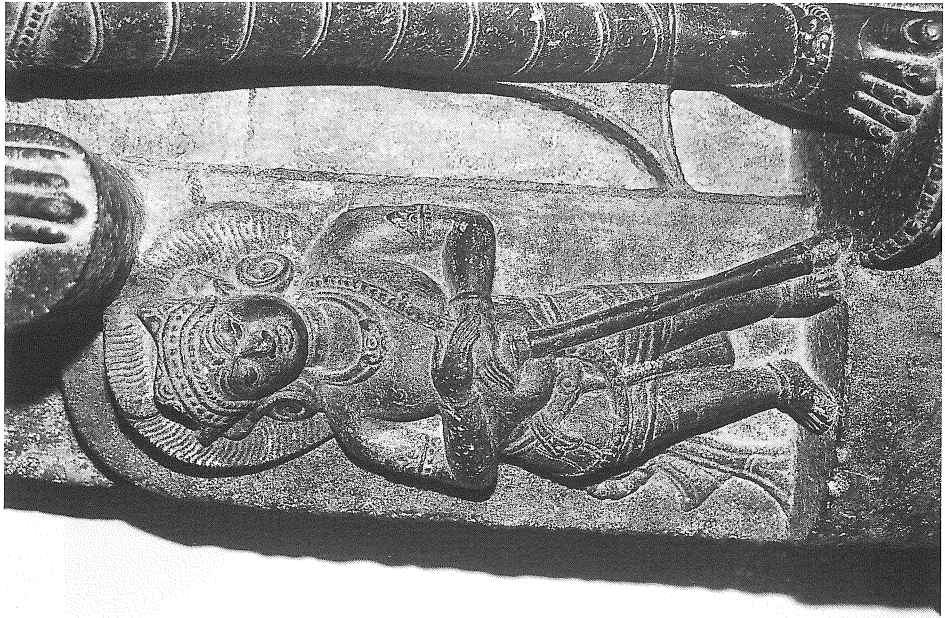


図4 図3部分(右脇侍)



図3 両脇侍をとる弥勒立像(ボードガヤ博物館)

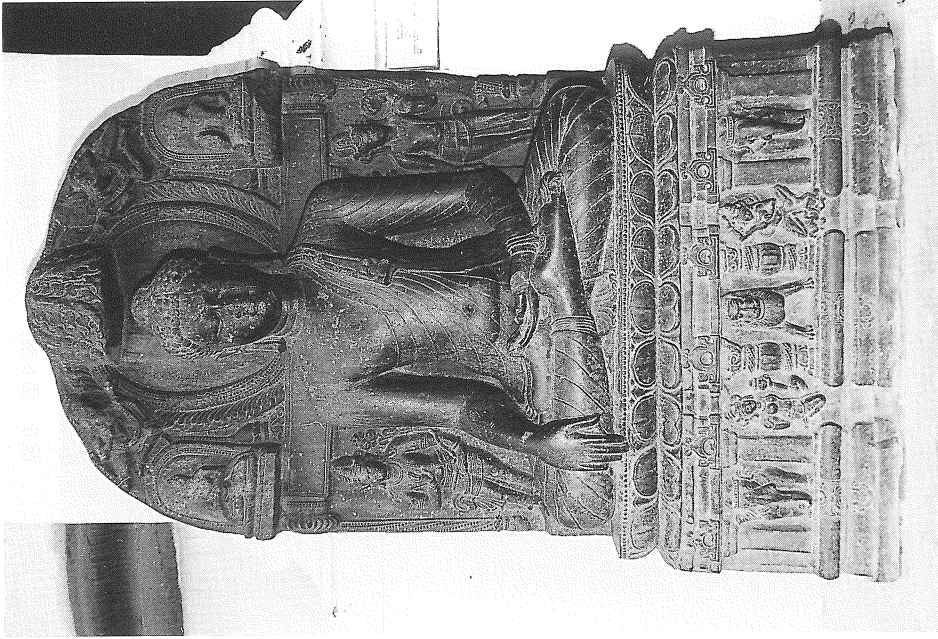


図6 脇侍菩薩をとる触地印仏坐像（インド博物館）



図5 脇侍菩薩をとる触地印仏坐像（ナラーンダー博物館）

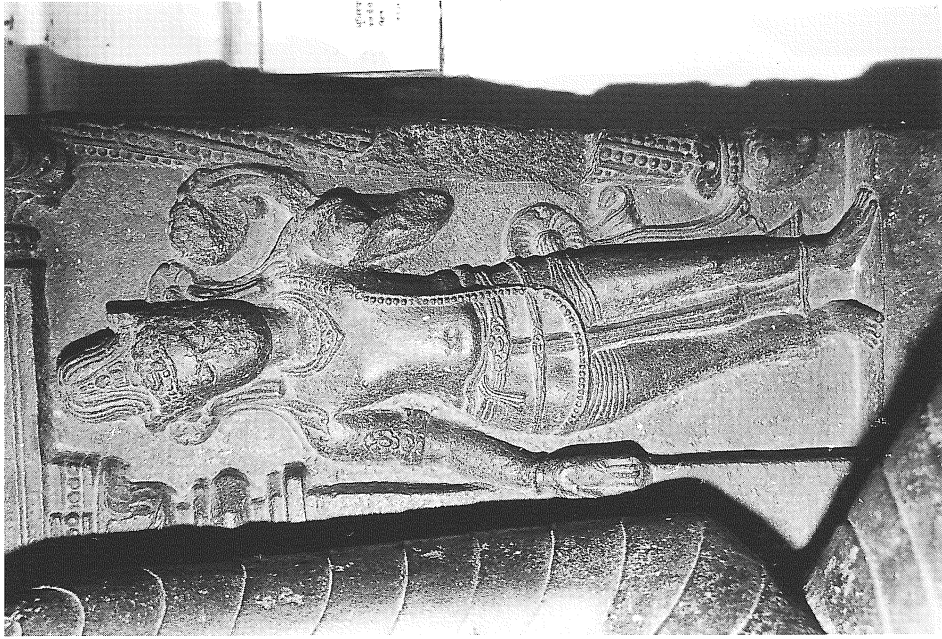


図8 図6部分(左脇侍の観音)



図7 図6部分(右脇侍の弥勒)



図10 図9部分（右脇侍の観音）



図9 脇侍菩薩をとる触地印仏坐像（インド博物館）



図12 脇侍菩薩をとる触地印仏坐像 (ヴァレーンドラ博物館)



図11 図9部分 (左脇侍の弥勒)



図14 脇侍菩薩をとる転法輪印仏坐像 (ヴァレンドラ博物館)



図13 脇侍菩薩をとる触地印仏坐像 (バングラデッシュ国立博物館)



図16 脇侍菩薩をとる施無畏印仏立像 (ヴァレンドンラ博物館)



図15 脇侍菩薩をとる施無畏印仏立像 (ナランダー博物館)



図18 図16部分 (左脇侍の弥勒)



図17 図16部分 (右脇侍の観音)



図20 宝冠触地印仏を主尊とし、脇侍菩薩をとる仏伝釈迦像 (パトナ博物館)



図19 脇侍菩薩をとる触地印宝冠仏坐像 (インド博物館)